

Pierre における真理の探求

倉 橋 洋 子

The Quest for Truth in *Pierre*

Yoko Kurahashi

序

Herman Melville は、*Pierre, or the Ambiguities* (1852) の執筆に当り、親しく交際していた Nathaniel Hawthorne の妻の Sophia Hawthorne に、1852年1月手紙を送った。その一部は次に示す通りである。“But, my Dear Lady, I shall not again send you a bowl of salt water. The next chalice I shall commend, will be a rural bowl of milk.”¹ Melville がこのような手紙を送った原因には、彼の当時の経済的圧迫に加え、*Moby-Dick* (1851) で名声が得られなかったことがあげられる。即ち、Melville には、大衆の好みに合うように *Pierre* を書こうという意図があったと考えられる。

確かに *Pierre* は、これまでの Melville の作品や、*Moby-Dick* とは異なり、家庭内の問題を題材として扱っている。しかし、Edgar A. Dryden は、Melville の従来のテーマがこの作品には流れていると指摘している。² *Pierre* のテーマを調べるに当り、Melville が新たに取組んだ分野の小説の登場人物と、彼等の人間関係は無視できないと考えられる。この点に関して、William Ellery Sedgwick も指摘している。³

ところで、*Pierre* はこれまで、神話、宗教、社会、あるいは、小説の形式等、種々の角度から研究されてきた。しかし、これらの研究は Melville の意図に関して一致した見解を示していない。従って、本稿においては、登場人物の分析を通して、作品のテーマを明らかにすると共に、Melville の理論の背景も探求する試みである。

-
- 1 Herman Melville, *The Letters of Herman Melville*, ed, Merrell R. Davis and William H. Gilman (New Haven, 1960), p. 146.
 - 2 Edgar A. Dryden, *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth* (The Johns Hopkins University Press, 1981), p. 117.
 - 3 William Ellery Sedgwick, *Herman Melville: The Tragedy of Mind* (New York: Russell & Russell, 1972), p. 138.

I

Pierre の第一の書は Hawthorne 夫人への約束通り、平和な牧歌的な田園の描写で始まっている。このエデンの園のような田園, Saddle-Meadows に富裕な未亡人, Mary Glendinning 夫人とその一人息子, Pierre Glendinning が住んでいる。静かな田園の描写にもかかわらず, ナレーターは, ⁴ すでに主人公の青年, Pierre の将来に変化が生じることを次のように予言している。

So the country was a glorious benediction to young Pierre; we shall see if that blessing pass from him as did the divine blessing from the Hebrews; we shall yet see again, I say, whether Fate hath not just a little bit of a word or two to say in this world; we shall see whether this wee scrap of latinity be very far out of the way — *Nemo contra Deum nisi Deus ipse.* ⁵

ナレーターの語る「運命」の予言とは、具体的には、Isabel Banford の出現である。彼女は、Pierre の父と、彼が独身時代親しくしていたフランス人の移民女性との間に生まれたが、認知されず、不運に過ごしてきた娘である。Isabel の出現により、Pierre の父のこれまでの紳士、クリスチャンとしての誉れ高い面に加え、新たな面が明らかにされる。Pierre の父の人格は、彼の二つの肖像画に示されている。⁶ 一つは、大きな油絵で Glendinning 家の大広間に掛けられており、もう一つは、小さな油絵で人目を忍ぶように個室に掛けられている。大きい方の絵は、Pierre の父の中年の時のもので、Glendinning 夫人によれば、純正、高貴な面を複合している。小さい方の肖像画は、Pierre の父が、Isabel の母となる女性と親しくしていた時期に、彼の従兄弟が描いたものである。この絵には、当時の Pierre の父の Isabel の母に対する感情が表現されている。Glendinning 夫人によれば、この小さい方の絵は、彼女の夫を裏切るものである。Pierre の目にさえ、二つの絵は似ておらず、大きい方の絵が彼の父に生写しである。

従って、大きい方の肖像画に、Pierre にとって、Isabel 出現以前の父の一人格が、また、Isabel の存在を知らない Glendinning 夫人にとって、夫の全人格が表わされている。一方、

4 ナレーターの重要性は、Richard H. Brodhead, *Hawthorne, Melville, and the Novel* (The University of Chicago Press, 1976), Edgar A. Dryden, *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth* (The Johns Hopkins University Press, 1981) および Bert C. Bach, "Narrative Technique and Structure in *Pierre*", *Studies in the Minor and Later Works of Melville*, ed. Raymona E. Hull (Transcendental Books, 1970) において検討されている。

5. Herman Melville, *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford, Vol. VII (Northwestern University Press and The Newberry Library, 1971), p. 14.

6. Edward H. Rosenberry, *Melville* (Routledge & Kagan Paul, 1979), p. 94.

小さい方の肖像画に, Pierre にとって, Isabel 出現以後明らかになった父の人格が, 即ち, Glendinning 夫人が直感的に嫌悪すべきものが表わされていると言える。ところで, Pierre が, 父の性的不道徳を発見することは, *Moby-Dick* の Ahab が彼の足を失うことと同じ意味を持つ。⁷ 即ち, Ahab は *Moby Dick* の残酷さから自然の悪の本質を, 一方 Pierre は父の罪から, 社会的な悪の本質を認識する。両者の違いは, Ahab の認識する悪は自然のものであるが, Pierre の認識する悪は社会的, 道徳的なものであるという点にある。

ところで, Pierre の副題, *the Ambiguities* は, 何を意味しているのであろうか。それを Pierre の父の人格と合わせて考察してみる。Isabel の出現により Pierre の父の人格の二面性が認識されたが, それが, 副題 *the Ambiguities* の一つであらうと考えられる。また, *the Ambiguities* が複数であることから, 新たに明らかにされる “Ambiguities” が存在するであらうと推測される。

さて次に, Glendinning 夫人の人格について考察を加えてみる。彼女の傲慢な人格に関して, Isabel の存在を知った Pierre には, 次のように予測がついていた。“Acutely sensible to those prophetic intimations in him, which painted in advance the haughty temper of his offended mother, as all bitterness and scorn toward a son, once the object of her proudest joy, but now become a deep reproach, as not only rebellious to her, but glaringly dishonorable before the world;...”⁸ 実際にこの予測通りになるが, Pierre にとって母の人格が最初に具体的になったのは, Ned と Delly の姦通事件に関する Glendinning 夫人と, 牧師 Falsgrave との話し合いにおいてである。Glendinning 夫人は, Ned と Delly を彼女の土地から追放する意志を持ち, また, 嫡子と私生児に関する一般論において, 私生児は受入れられるべきでないという考えを持っている。このような Glendinning 夫人の厳格な, また無慈悲とも思われる考えを認識して, Pierre がこれまで母に対して抱いていた感情が崩れる。それは, 彼が母を姉のように “Sister Mary” と呼んでいたが, “Madam” と冷やかに呼ぶことから判断できる。Pierre の母のこのような人格は, Pierre にとって父の人格と同様に, “Ambiguities” の一つである。

II

Pierre には従兄弟があり, 名前を Glendinning Stanly (通称 Glen) という。彼は 21 歳の若さで貴顕の身代を継ぎ, 都会に住んでいる。彼と Pierre とは, 幼年時代から交友関係にある。Pierre は母の亡き夫に対する信頼と彼女のプライドを傷付けないで, Isabel を救う方法を考える。その結果, 彼は Lucy Tartan との婚約を破棄し, Isabel と偽装結婚をし,

7. Richard H. Brodhead, *Hawthorne, Melville, and the Novel* (The University of Chicago Press, 1976), p. 169.

8. Melville, *The Writings of Herman Melville*, p. 179.

Delly を伴い、Glen を頼って都会へ出立する。Glen は手紙で、Pierre 等のために家も食料も全て準備しておく、約束したにもかかわらず Pierre を追い払う。Glen の Pierre に対するこの態度により、Pierre は Glen の人格を新たに発見し、認識することになる。Glen の人格のこの二面性が、Pierre の父母のそれに加えて、“Ambiguities” の一つとなると考えられる。

Pierre は Isabel の存在を知り、都会に出てくるまで、静な田舎で母の庇護の下にあり、現実に直面したあとがなかった。⁹ 彼は Dante や Shakespear の読者であったが、*The Inferno* の寓意的意味も発見できず、*Hamlet* の絶望的な暗さに立ち入り開眼することもできなかつた。Pierre は、*Billy Budd* の Billy のように、純粹無垢で、現実に対する経験と認識に欠けていた。“Ambiguities” とは、Pierre の父母や Glen の人格が示す多義性であるが、多義性の存在こそ現実である。Pierre は Isabel の存在を媒体として、現実に直面するのである。

ところで、Pierre が初めて Isabel に会った時、彼は姉に対する憧れと、姉の不遇な状況に対する同情以外胸に抱かなかつた。しかし、彼の Isabel に対する感情が異性に対するそれを含み始め、さらに、次に暗示されているように、彼は近親相姦の罪を犯す。

Old Titan's self was the son of incestuous Coelus and Terra, the son of incestuous Heaven and Earth. And Titan married his mother Terra, another and accumulatively incestuous match. And thereof Enceladus was one issue. So Enceladus was both the son and grandson of an incest; and even thus, there had been born from the organic blended heavenliness and earthliness of Pierre, another mixed, uncertain, heaven-aspiring, but still not wholly earth-emancipated mood; which again, by its terrestrial taint held down to its terrestrial mother, generated there the present doubly incestuous Enceladus within him; so that the present mood of Pierre — that reckless sky-assaulting mood of his, was nevertheless on one side the grandson of the sky.¹⁰

Pierre と母は、Saddle-Meadows に住んでいた頃、互いに “Sister”, “Brother” と呼び合い無意識のうちに恋人同志のような関係にあった。また、Pierre は後に Isabel と夫婦関係を結ぶ。このような関係が、引用に示されているように、二重の近親相姦的な Enceladus を生み出しているのである。Pierre が Isabel を救い出そうとしたことは、純粹な「天上性」であるが、彼自身自覚していない部分に「地上性」が存在している。それが Isabel との近親相

9. Sedgwick, *op. cit.*, p. 139.

10. Melville, *The Writings of Herman Melville*, p. 347.

姦へとつながっていく。Pierre の人格にも “Ambiguities” の一つが存在していたのである。しかし、彼自身それに気付いていないところに、悲劇が存在する。Melville が影響を受けた作家 Hawthorne の作品、“Young Goodman Brown” の主人公の Brown が、彼自身の罪に気付かなかったところに、悲劇が存在したように。

III

さて、Pierre の人生を大きく変える田舎から都会への旅の途中、馬車の中で彼は Plotinus Plinlimmon のパンフレットを発見する。パンフレットには二つの生き方が示されている。現実に直面した Pierre の取った生き方と、他の登場人物の生き方を Plinlimmon パンフレットによって考察してみる。

Plinlimmon パンフレットに示されている二つの生き方とは、“Chronometricals”（標準時計）と“Horologicals”（時差修正時計）である。“Chronometricals”とは次に示すようにキリストである。“Bacon’s brains were mere watch-maker’s brains; but Christ was a chronometer; and the most exquisitely adjusted and exact one, and the least affected by all terrestrial jarrings, of any that have ever come to us.”¹¹ しかし、この世の人間が“Chronometricals”に従って行動した場合には、本質的成功を納めることができず、下記の引用で示されているように、キリストとは異なり、“strange, unique follies and sins, unimagined before”を犯すことになる。

Though Christ encountered woe in both the precept and the practice of his chronometricals, yet did he remain throughout entirely without folly or sin. Whereas, almost invariably, with inferior beings, the absolute effort to live in this world according to the strict letter of the chronometricals is, somehow, apt to involve those inferior beings eventually in strange, *unique* follies and sins, unimagined before.¹²

グリニッチで適当な標準時計も場所が変われば不適當で、時差修正時計が適しているように、“Chronometricals”が必ずしも地上の人間には適さないのである。

一方キリストとは異なり、小さな罪を犯したからと言って永遠の悲観に陥いる必要もなく、さしさわりのない範囲内で便宜的善を行い、妻子、友人等に対して真実の愛を与える平均的人間の存在がある。そのような平均的人間を“... he is a man and a horologe.”¹³とパンフレットは論じる。“Horologicals”はささいな罪を問題にしていないが、徹底的な利己主義あるいは人間的悪魔主義を禁じている。従って、Plinlimmon パンフレットによると、

11. *Ibid.*, p. 211.

12. *Ibid.*, p. 213.

13. *Ibid.*, p. 214.

“horologe”である地上の人間は“chronometrical conceit”によって規制されてはならない。次に示すように正常な便宜主義(“virtuous expediency”)が、多くの人々にとって最も望ましい実行可能な善である。“A virtuous expediency, then, seems the highest desirable or attainable earthly excellence for the mass of men, and is the only earthly excellence that their Creator intended for them.”¹⁴

ところで、Pierre は Isabel の存在に気付く以前は、“Horologicals”に従い、“virtuous expediency”によって生活をしてきた。Isabel の存在によって、父の“Ambiguities”即ち、現実と直面した時、Pierre は次のように“Truth”を求めて、“Chronometricals”に従って行動しようと決心する。“Henceforth I will know nothing but Truth; glad Truth, or sad Truth; I will know what *is*, and do what my deepest angel dictates.”¹⁵ Pierre は、現実を認識した時、倫理的選択という行動を通して、人間的、道徳的、“Truth”をめざすが、*Moby-Dick* の Ahab は、Moby Dick を捕えるという物理的行動を通して真理を追求しようとする。Melville が手紙で Hathorne 夫人に表明していることは、この両者の相違に表われている。即ち、Richard H. Brodhead が次に指摘しているように、Pierre と Ahab の行動の相違は必然的に、Melville の *Moby-Dick* から *Pierre* への小説の分野の変化へとつながっていく。“This crucial shift in focus helps to explain Melville’s change of fictional genre from *Moby-Dick* to *Pierre*. The action of the latter requires a social, not a natural setting.”¹⁶

さて、Pierre が“Truth”を求めて生計の見通しも立たないまま都会へ出たことは、結果的に、Pierre の母を悲しみと怒りのために狂い死にさせ、Lucy を病気にさせ、Lucy に求婚していた Glen を射殺することになる。Glen の殺害の結果、Pierre は警察に拘禁される。そこで Lucy は、Isabel から Pierre と Isabel が姉弟であり、しかも夫婦関係にあったことを知らされる。Lucy は驚きと悲しみのため死に至る。また、Pierre と Isabel は監房にて自殺を計ることになる。以上みてきたように、“Chronometricals”に従って行動してきた Pierre は、Plinlimmon パンフレットが示す通り、“strange, *unique follies and sins, unimagined before*”を犯してしまうのである。これは、Pierre 自身“Ambiguities”を持った存在、即ち、「天性」と「地性」を持った存在、言い換えれば、地上の人間であるにもかかわらず、彼自身それを明確に認識しないまま、“Chronometricals”に従って行動してきた結果である。Pierre は Ahab のように最初認識し、避けたものよりもっと大きな罪を犯すことになるのである。

ところで、Lucy は色白で青い目をした金髪の女性である。一方 Isabel は Lucy とは対照

14. *Loc. cit.*

15. *Ibid.*, p. 65.

16. Brodhead, *op. cit.*, p. 170.

的に、黒髪の神秘的な女性である。Lucy と Isabel の “light lady” と “dark lady” との対比は、Melville が19世紀小説のコンベンションを使用したことを示している。¹⁷ Lucy は、Pierre が自分自身を犠牲にしていると考え、彼への純粋に献身的な愛から、彼と Isabel を守るために途中から彼等の生活に加わる。しかし、その結果、Lucy は彼の母から見放され、Pierre は Glen や彼女の兄と敵対することになる。結局、Lucy の Pierre と Isabel との生活への参加は、Pierre の Isabel に対する姉以上の感情の抑制になるかもしれないが、彼の具体的な助けにはならない。彼女は “good angel”¹⁸ と表現されているように、純粋無垢ではあるが、現実と直面している Pierre を導くことはできない。一方、Isabel はコンベンション通り、情熱的で、フランス人を母に持つことから異国的で、Pierre と近親相姦の罪を犯す。彼女は自分自身を “Bad angel”¹⁹ と表現しているが、彼女自身は “Bad angel” ではない。彼女は Pierre を現実の悪と直面させる、つまり新たな経験をさせる役割を果たしているにすぎない。Pierre における “light lady” は、純粋無垢のイメージを持ち、“dark lady” は、情熱と経験の世界のイメージを持つ。しかし、いずれにしても、彼女達は Pierre を救える人物ではない。

IV

Plinlimmon パンフレットの理論によれば、Glendinning 夫人と Glen とは、“Horologicals” に従って行動する人物であるが、彼等の Pierre に対する行動は利己主義に傾いている。牧師の Falsgrave は “Horologicals” の説くところの “virtuous expediency” を実践している人物のようである。しかし、Ned と Delly の事件に関して Glendinning 夫人と Pierre の意見が対立した時、Falsgrave は両者と異なる意見を持ちながら明言を避けている。彼は感情を抑制しすぎ、その結果消極的になり、Pierre の相談相手にすらなれない。結局、彼は *Moby-Dick* の Starbuck のように行動には出れない人物である。

公にされた Plinlimmon の使徒は Charlie Millthorpe である。彼は Pierre の幼な馴染で、都会に出てきた Pierre に住居の世話をしたり、借金の肩がわりをする親切な人物である。彼は Plinlimmon の教えを理解している人物のようであるが、牧師の Falsgrave と同様に、知 (head) と情 (heart) のバランスが不均衡である。Falsgrave は知に傾きすぎており、一方、Millthorpe は Pierre が “Plus heart, minus head”²⁰ と指摘しているように

17. Brodhead は次のように Melville のコンベンションについて書いている。

“A close look at *Pierre* indicates that Melville’s emphasis on the conventionality of the conventions he resorts to may be the product not of his disabilities but of conscious preference on his part.” Brodhead, *op. cit.*, p. 171.

18. Melville, *The Writings of Herman Melville*, p. 314.

19. *Ibid.*, p. 315.

20. *Ibid.*, p. 320.

情に傾きすぎている。さらに、Pierre は次に示すように、Millthorpe が Plinlimmon の内に踏み入って彼を認識しているとは考えていない。

But Pierre declined; and could not help thinking, that though in all human probability Plotinus well understood Millthorpe, yet Millthorpe could hardly yet have wound himself into Plotinus; — though indeed Plotinus — who at times was capable of assuming a very off-hand, confidential, and simple, sophomore air — might, for reasons best known to himself, have tacitly pretended to Millthorpe, that he (Millthorpe) had thoroughly wriggled himself into his (Plotinus') innermost soul. ²¹

一方、Pierre の方は、Plinlimmon パンフレットを馬車の中で読むが、それを紛失してしまい、ついに見つけ出すことができない。しかし、皮肉にもそれは彼の外套の裏打に入っており、それを彼は絶えず身に付けていたのである。ナレーターによると、このことは、Pierre 自身パンフレットを理解していたが、理解していた自分に気が付かなかったことを意味している。さらに、ナレーターは次のように続けている。“I think that—regarded in one light—the final career of Pierre will seem to show, that he *did* understand it.” ²² これは、Pierre が最後に “All's o'er, and ye know him not!” ²³ と言って息をひき取る場面を指摘していると考えられる。Pierre は自分自身を “the fool of Truth, the fool of Virtue” ²⁴ と語っているように、現実を認識するようにはなるが、自分自身の現実には気付かず、“Virtue” と “Truth” を追求してきた。ナレーターが語るように、もし Pierre が、Plinlimmon パンフレットの内容を理解していたとしても、Pierre の生涯を見る限りにおいて、彼はパンフレットを理解する力はあったかもしれないが、彼自身の二面性を理解、認識する力に欠けており、死際にやっと認識したと考えざるを得ない。

V

以上、現実に直面した主人公、Pierre の “Truth” の探究の過程とその結果の破滅を検討してきた。Pierre の中心的なテーマは、純粹無垢な人間が現実の悪に直面し真理を追求するが、彼自身にも “Ambiguities”，即ち、善悪の二面があり、それに気付かず真理を追求することは、Plinlimmon パンフレットに示されているように破滅（主人公の精神的成長は認められるが）につながるということであった。R. W. B. Lewis は、無垢な主人公の経験と墮落（墮落の結果、精神的成長をするので「幸運な墮落」と称する）の過程を扱ったテーマを「ア

21. *Ibid.*, pp. 291-292.

22. *Ibid.*, p. 294.

23. *Ibid.*, p. 362.

24. *Ibid.*, p. 358.

「アダムもの」と称し、このテーマを認めた作家として、Hawthorne, Melville, Henry James, William Faulkner をあげている。²⁵ これは、アメリカの小説家の経験、現実の認識に対する表現方法として有効であったために用いられた主要なテーマであったと考えられる。この章では、*Pierre* においてこのようなテーマを扱った Melville の理論の背景を考えてみる。

Melville は *Moby-Dick* においても真理の探究を描いている。しかし、次に示すように、Ahab にとって、現実は一面ではない。

All visible objects, man, are but as pasteboard masks. But in each event — in the living act, the undoubted deed — there, some unknown but still reasoning thing puts forth the mouldings of its features from behind the unreasoning mask. If man will strike, strike through the mask! How can the prisoner reach outside except by thrusting through the wall? To me, the white whale is that wall, shoved near to me. ²⁶

Moby-Dick においても *Pierre* と同様に、主人公の Ahab は絶対的真理を把握することはできない。即ち、*Pierre* においても *Moby-Dick* においても現実には絶対的真理は存在しない。現実が多義的な、二面的なものを含んでいる。これは、Melville の現実のとらえ方と一致していると考えられる。ところで、Melville は評論、“Hawthorne and His Mosses” で Hawthorne の作品を批評して、次のように書いている。“For spite of all the Indian-summer sunlight on the hither side of Hawthorne’s soul, the other side — like the dark half of the physical sphere — is shrouded in a blackness, ten times black.”²⁷ この文章は Melville が Hawthorne の作品を批評したものではあるが、Melville 自身の考え方も示していると考えられる。つまり、現実に対する Melville の明暗の二面的なとらえ方を示している。Melville の現実に対するこの二面的なとらえ方が、「究極の探究」の三部作と言われる *Moby-Dick*, *Pierre* の根底にも存在すると考えられる。結局 Melville は、このような彼の現実の認識の有効な表現方法として、「アダムもの」のテーマを *Pierre* で扱っているのであろう。

さて、このような現実に対峙する仕方を Melville は *Pierre* の Plinlimmon パンフレットの中で示している。このように人間の生き方を提示した Melville の理論の背景を検討してみる。作品の中では、Melville が Plinlimmon パンフレットの示す生き方を信奉していたかどうかは明白ではない。しかし、Melville がこのような論旨を展開した背景は、彼が Haw-

25. R. W. B. Lewis, *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century* (The University of Chicago, 1955), p. 127.

26. Herman Melville, *Moby Dick, or the Whale* (London: Oxford University Press, 1966), p. 167.

27. Herman Melville, “Hawthorne and His Mosses”, *The Shock of Recognition*, ed. Edmond Wilson, Vol. I. (New York: Octagon Books, 1975), p. 192.

thorne に最後に会った時の Melville の様子から推測できる。その時のことを、Hawthorne は、*The English Notebooks* に書いている。

Melville, as he always does, began to reason of Providence and futurity, and of everything that lies beyond human ken, and informed me that he had "pretty much made up his mind to be annihilated"; but still he does not seem to rest in that anticipation; and, I think, will never rest until he gets hold of a definite belief. It is strange how he persists — and has persisted ever since I knew him, and probably long before — in wandering to-and-fro over these deserts, as dismal and monotonous as the sand hills amid which we were sitting. He can neither believe, nor be comfortable in his unbelief; and he is too honest and courageous not to try to do one or the other. If he were a religious man, he would be one of the most truly religious and reverential; he has a very high and noble nature, and better worth immortality than most of us. ²⁸

Melville は信仰を持つことも、不信仰に落ち着くこともできなかった。彼はどちらか一方に決められなかったのである。このような信仰と不信仰とのジレンマは、現実を二面的にとらえていた Melville にとって当然のことであったかもしれない。このジレンマが Plinlimmon パンフレットの理論の背景にある。即ち、“Chronometricals” (キリスト) の教えは地上の善悪の二面を持った人間には不適當で、“virtuous expediency” が適當であるという理論は、Melville のこのジレンマに由来すると考えられる。以上みてきたように、*Pierre* のテーマの背景には、Melville の現実に対する二面的なとらえ方が存在する。その現実に対処する仕方として、“virtuous expediency” を Melville は説いているが、その理論の背景には、Melville の信仰と不信仰とのジレンマが存在していると考えられる。

参 考 文 献

- Bach, Bert C. "Narrative Technique and Structure in *Pierre*," *Studies in the Minor and Later Works of Melville* edited by Raymona E. Hull. Transcendental Books, 1970.
- Bernstein, John. *Pacifism and Rebellion in the Writings of Herman Melville*. Mouton & Co., 1964.
- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. Duke University Press, 1943.
- Brodhead, Richard H. *Hawthorne, Melville, and the Novel*. The University of Chicago Press, 1976.

28 Nathaniel Hawthorne, *The English Notebooks*, ed. Randall Stewart (New York: Russell & Russell, 1969). p. 433.

- Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. The Johns Hopkins University Press, 1981.
- Hawthorne, Nathaniel. *The English Notebooks* edited by Randall Stewart. Russell & Russel Inc., 1969.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. The University of Chicago, 1955.
- Melville, Herman. *The Writings of Herman Melville* edited by Harrison Hayford, Vol. VII. Northwestern University Press and The Newberry Library, 1971.
- . *Moby Dick, or the Whale*. Oxford University Press, 1966.
- . "Hawthorne and His Mosses", *The Shock of Recognition* edited by Edmond Wilson, Vol. I. Octagon Books, 1975.
- . *The Letters of Herman Melville* edited by Merrell R. Davis and William H. Gilman. New Haven, 1960.
- Rosenberry, Edward H. *Melville*. Routledge & Kagan Paul, 1979.
- Sedgwick, William Ellery. *Herman Melville: The Tragedy of Mind*. Russell & Russell, 1972.
- Sherrill, Rowland A. *The Prophetic Melville: Experience, Transcendence, and Tragedy*. The University of Georgia Press, 1979.